

インタビュー

「高野山開創 1200 年」を迎えて

高野山真言宗 宗務総長

添田 隆昭氏に聞く

弘法大師空海は、816（弘仁 7）年、高野山に真言密教の根本道場を開くため、時の帝、嵯峨天皇に、下賜の請願を上奏されました。大師は、都の喧騒を離れ、紀伊山地の雄大な自然の中にある高野山を密教の聖地として選びました。

また、空海ゆかりの「四国八十八ヶ所」全てをまわり終えると結願成就、その後、高野山に詣でて、満願成就になるといわれています。

本年は、「高野山開創 1200 年」を迎えます。この記念すべき年に、高野山では、4 月 2 日から 5 月 21 日までの 50 日間、空海がのこしたみ教えへの感謝をこめて、絢爛壮麗な大法会が執り行われます。1200 年という大きな節目を迎え、次の百年、千年へと続く新たな時代への扉が開かれます。

——本日は、お忙しいなか、インタビューの機会を与えて頂き、ありがとうございます。弘法大師空海により、蓮の花ともたとえられる峰々に囲まれた、ここ高野に、真言密教の根本道場が開かれて 1200 年を迎えます。

また、このほど、新しい座主に、中西啓寶（けいほう）大僧正がご就任され、「高野山開創 1200 年記念大法会」という大事業が行われようとしておられます。国内のみならず海外からも、真言宗にゆかりのある寺院あるいは他の宗派から、多くのお坊様や、大師を慕う一般の方々がお越しになられると伺っております。この「大法会」について、その意義やどのようなことが行われるのか、お話し頂けますか。

【開創 1200 年大法会】

（添田宗務総長）弘法大師様のご生涯は、誕生の時と、高野山を開かれた時と、入定（にゅうじょう）、すなわち一般には、亡くなられた時

ですが、現在も続く奥の院の岩屋の中で座禅をはじめられた時の 3 つを生涯のエポックとしています。それぞれ 50 年毎に、誕生、開創、入定の法要を繰り返しています。たまたま、今回は、「開創 1200 年」の 50 年ぶりの法要で、その間、どれだけ、私達が弘法大師様のことを正しく伝えてきたかという 50 年に一度の定期試験のようなもので、前回の 50 年前がどのようなものであったか、たくさん記録が残っているので、担当する者としては、それに負けないよう、という気持ちがあります。当然、戦争や社会的混乱期であったり、社会の変化も影響しているので、それぞれの法要は、その当時の社会情勢も反映しています。そういう意味で、今回の法要は、前回の昭和 40 年の法要以来 50 年間、私どもが弘法大師様の教えをどれだけちゃんと伝えてきたかということを皆さんに問う機会でもあります。それが 50 年に 1 回行われる目的です。



【様々な弘法大師との出会い】

では、何を伝えるかということですが、一つは、高野山が1200年という長い歴史において宗教的ないのちをどのように保ってきたかということです。弘法大師様は、亡くなっておられない、今なお奥の院の東の地下の石室で坐禅を組んでおられます。日本の仏教には、たくさんの偉いお坊さんがおられますが、どなたも亡くなった時点でその生涯が完結しています。弘法大師様の場合、完結せずに、また次の歴史が始まります。それが他のお坊さんとの違いです。1200年前、平安時代の初めに活動していた人が、今も生きたまま、地下の石室で座禅を続けている。非常に荒唐無稽な話ですが、なかなか現在の科学的な思考からは信じがたい点があります。では、この信仰は、1200年間、どうして続いてきたのか。

現在でも、自分の人生の中で、たまたま生きるか死ぬかという危機に巡り合った時、その人が、長い間、弘法大師様を信仰していて、ひたすらお祈りした、もちろんそういうケースもあります。反対に、全く無信心で、弘法大師の名前すら知らなかったにもかかわらず、弘法大師様のほうから、その人を選んで苦難に立ち向か

わせて下さった——そういう形で弘法大師に救ってもらったという話も聞きます。

たまたま私は山に住んでおりますから、色々な信者の方が来られて自分の体験をお話になります。そういった信者の一人ひとりと弘法大師様との出会いの積み重ねこそが、一見、荒唐無稽な信仰を1200年間、綿々として絶えさせずにきた根本です。もちろん、弘法大師様がお伝えになった密教そのものの偉大さ、奥深さがその根源にあり、大法会はそれをお伝えする機会を与えていただけるということです。

【1200年続く儀式の法式を継承】

——この開創 1200 年大法会では、記念事業として、高野山大学黎明館の建設、壇上伽藍・中門の再興など、いろいろな事業を計画されておられますね。

（添田宗務総長）4月2日にスタートし、5月21日までの50日間に執り行われる様々な法要は、弘法大師様ご自身が定められた法式に従って行われます。若干、時代毎にアレンジはしていますが、基本的には、弘法大師様の法式を継承しています。読んでいるお経にしても、弘法大師様が中国から持ち帰られたものが多いのですが、「その当時、中国の長安で読まれていた中国語で読むように」と定められています。もちろん、1200年も経っているので、中国語も変化してきていますが…。基本的には、弘法大師様が中国で読まれた通り、そのまま守っています。

儀式の形式も当時のままで、儀式で身に着ける衣も、弘法大師様が定められたものを着ます。そして、定められた規則に則って法要を行います。それが1200年、続いています。われわれは毎日やっていることですが、大法会となると、全国からお手伝いにたくさんの方が来て下さいます。そういう方々と50日間一緒に過ごし、1日3回お参りをする——それは、1200年の時間が凝縮された50日間と言えます。



【現在の伽藍は、弘法大師のイメージ通り】

それに併せて、高野山大学黎明館、中門再建等の記念事業もあります。これも、最初に弘法大師様がイメージされた全体像があるわけです。大師様が活動しているときは、今の根本大塔の下層部分、一番下のところしか出来ていませんでした。そこで、最初の法要が行われました。その後を託されたのが、弘法大師様の甥で、二世と言われている真然という方で、この方は、当時としては非常に長寿で、一説によれば88歳まで生き、この方の努力で、弘法大師様がイメージした伽藍が完成しました。

しかし、この伽藍は、100年ほど後、根本大塔が落雷で焼失し、何もなくなっていました。一時は、人も住めなくなり、人々は高野山の下の天野の里に降り、そこでやっと生活出来たという状況に陥りました。そういう意味で、我々からすれば、「弘法大師様がイメージされた草創期の伽藍が常にあるようにする」というのが、弘法大師様の思いに込められていることだと思います。今が一番、それに近づいていると思います。

高野山とて必ずしも豊かな時ばかりではありませんでした。かつて、何にもなくて、人も住んでいなくて、高野山はこれで終わりかな、という時が何度もありました。開創100年頃の最初の危機を乗り越えて、その後、2回位、大火災がありました。決して、順風満帆の中で、現在の宗教的な地位を獲得したわけではありません。それは血の滲むような努力をもって先人は乗り越えてきました。そういう意味では、この伽藍もいつまで持ちこたえられるか、根本大塔

なんて、100年も経たずに、必ず落雷で焼けてしまいます。あんな巨大なものが焼けると、周囲の建物にも類焼してしまいます。

西暦994年の焼失の後、平清盛が再建し、有名な「血曼荼羅」を奉納しました。おそらく、根本大塔が建っていた期間と無かった期間を比べると、無かった期間の方が長いのではないかと。建つと途端に、待ってましたとばかりに雷が落ちる。今の伽藍の形式は、弘法大師様の描いたイメージにほぼ近づいています。

——今、この見事な伽藍があるということは、奇跡的なことかもしれません。この時代に生きる私たちは幸せですね。ところで、添田様は、「この大法会があつて、よかったなあ」といえるものにしたい」と仰っていましたが、ポスト「開創1200年大法会」に向けて、何か具体的にお考えになられていることはございますか。

【ポスト「開創1200年大法会」への危機感】

（添田宗務総長）この間、新聞に日本創成会議の「消滅可能性都市」（※消滅可能性都市とは、2040年迄に20～39歳の出産可能な若年女性が半減し、行政機能の維持が難しくなるとみられる自治体）というリストが発表され、北海道の夕張市などと共に、和歌山県高野町が83%で、全国で17番目に載っていました。

しかし、日常の生活感覚からみれば、それほど驚きませんでした。というのは、現在でも、小学校で、生徒数が1学年10人を切って1桁という時期はたくさんあります。1年から6年生まで合わせて100人を切っています。一方、亡くなる人は100人近くいます。100人死んで10人しか生まれない。同じことは日本国中で言えます。特に、現在は、地方で過疎化がどんどん進み、限界集落が増加し、人口移動も、東京へ一極集中しています。

1200年の歴史のある真言宗は、過疎地にたくさんのお寺があります。新しい宗教は、都市型で、あまり影響はないが、我々のような伝統宗

教は、あと50年、いや30年後には、過疎化が進み、末寺が成り立たなくなるところがたくさん出てくると思います。これは止めようがない。30年後に果たして、これからやろうとしている「大法会」のようなことが、出来るだろうか、という危機感を抱いています。

【伝統宗教と人口減少時代】

昭和59年に「入定1150年記念大法会」がありました。この時は50日間に100万人近くの人が高野山を訪れました。南海電鉄高野線の乗客数が40万人、大型バス、タクシー等が60万人でした。ところが、それから30年経った今、過疎化が進行し、各末寺が、前回の59年当時の人数をとて集められない。前はバス1台でやって来たのが、今度はタクシー1台です。当時まだ、「大師講」という講がありましたが、今はそれがない。かつてのコミュニティが崩壊しています。お越しになられる方のベースが減ってきています。59年時の100万人が、今回は3分の1くらいかなと思います。

これが、さらに30年後には、お寺、末寺そのものがなくなっていくのではないかと、3分の1くらいが消滅しているのではないかと危惧しています。「このような大法会ができたのが、『開創1200年大法会』が最後だったなあ」と言われなように、次の30年、50年をどうするか、日本全体で考えないといけない。日本の社会がどうなっているか、社会的な情勢をもろに反映しています。

【高野山の産業と町の発展】

——この人口減少時代、高野山、高野町に、若者に町に住んでもらわなければなりません。高野山は既に確立されたブランドですが、町の維持発展と産業の活性化については、どのようにお考えでしょうか。

（添田宗務総長）大変難しいことで、妙案はありませんが、我々にできることは宗教都市とし

ての地位を高めていくしかない。ブランドも常にシェイプ・アップしないといけない。ギリシャのパルテノン神殿のように単なる観光遺産になってしまっはいけない。もしくは、有馬温泉も弘法大師が開いた温泉、湯治場で、かつては宿坊がありましたが、今は坊さんがいなくなって、純然たる温泉宿になってしまいました。そうならないようにしたいと思います。

今、たくさんの外国人の方が高野山を訪れてくれます。彼らの話を聞きますと、「京都のお寺を見学した。立派な庭がある。すばらしい襖絵がある。しかし、これはすごいなあと一歩踏み入ろうとすると、大抵、そこにはロープが張ってあって、入っては駄目ですと書いてある。明日、関空から帰るのだが、たまたま旅程の都合で時間があつたので、京都から少し離れた高野山を訪れた。来てみたら、京都、奈良と同じような庭園があり、そこへ入って、浴衣に着替え、赤い毛氈に座り、箸で精進料理を食べた。これこそが、自分たちが日本に来る前に日本に対して持っていた日本のイメージだった。しかし、京都にはそのイメージの場所がどこにもなかった、日本にはもうないんだなあと感じていたら、高野山で初めて出会った。こここそが日本、This is Japanだ」と言われて、ああ、そんなものかなと思いました。

——外国人が求めていることは、結局そういうことなのですね。

【外国人が語る高野山の魅力】

（添田宗務総長）そうなんです。また、別の人ですが、「京都に行き、お寺は一杯あったが、





どこにも坊さんがいなかった。そして、お経も一回も聞かなかった。しかし、高野山に来てみたら、至る所に坊さんがいる。お寺では、朝の静寂の中で鐘の音が響き、坊さんがお経を読み、瞑想している。それが日常的に行われている。自分達も参加できる。これも高野山でしかできないことである」と言われました。京都のお寺では、坊さんが入場料の切符を切っていたりします！

——かつては風光明媚なところを訪れることが、観光の第一の目的でしたが、今は、その土地の人との出会いや体験が大きなファクターになっていますね。

【1ヶ月滞在したキプロス人夫妻のケース】

(添田宗務総長) 日本人は、「車を使い、点から点へと、観光地をあちこち見て回る」というのが観光のスタイルでしたが、外国からお客様を迎えるようになって、初めてわかったのですが、彼らは、全然違いますね。例えば、キプロスから来られた貿易の仕事をしているご夫婦は、最初来られた年は、1週間の滞在でした。翌年、来られた時は、長期休暇で1ヶ月滞在された。キプロスからヒースロー空港へ出て関空、それから高野山へ直行された。

ひと月の間、高野山からどこへも行かず、毎日、ぶらぶらしておられる。することもなく退

屈で、余りに所在なさそうなので、「この近くの天野に丹生都比売神社があり、大祭があるから、一度行ってみますか」と車で連れ出し、ゴルフ場の喫茶店に寄って、コーヒーを飲みました。「サンドイッチでも食べましょうか」と申しますと、「それを食べると、今夜の精進料理が食べられなくなる」と言われました。また、台所番の者から、「海苔と味噌汁等の朝食のメニューが(1ヶ月も滞在しているので)尽きてしまった」と言われ、ある朝、トーストとインスタント・コーヒーを出したところ、「ありがとう、でもこの御配慮は、明日からは要りません。我々は日本の朝食を食べに来ているのです」と言われました。

——外国人は、日本の本質に触れたくて日本を訪れます。外国人だから、洋風にもてなさねばならないというのは、実は逆で、私たちは日本的なものをブラッシュ・アップして提供する、ということが求められているのですね。

【自分達の文化に自信を】

(添田宗務総長) 日本人は、明治以来、西洋の文化に対してコンプレックスを持ち続けて来て、いかに自分達の文化を西洋化するかということに150年程かけて一生懸命追求してきました。そして、それは日常生活の中でほぼ達成されました。でも、外国から来た人から見れば、「それは全部、自分たちの国にあったものだから、何も有難くない。むしろ、本来、日本にしかないものが欲しいのだ」ということを、外国人が来ることによって初めて我々も知りました。

西洋のものを取り入れながら、いかにして、日本的なものを西洋化せずに、洗練させていくか、これが一番求められていますね。自分達の文化に自信を持たねばなりません。

——和歌山市出身の日本画家で、文化勲章も受賞した川端龍子は、若い頃はモダンボーイで、洋画家を志しましたが、米国遊学中、ボストン

で見たシャバンヌの大壁画に圧倒され、衝撃を受けました。文化や風土、伝統の中で培われた本物の重みに気付き、そこで初めて、自分が依って立つ国、日本と日本画の神髄に目覚めたといえます。

【土産物にも工夫を】

（添田宗務総長）外国人が来ることは、単にお金を落としてくれるとかいうことだけでなく、彼らを通して自分達の文化を再発見します。日本人は、なかなか、自分で自分の文化を評価できません。外国で評判になって初めて、「はあー、そんなものが近くにあったのか」と分かる。島国根性というのか、外来のものはすばらしいという潜在意識的なものがあり、DNAに刷り込まれています。

——かつて、「舶来」という言葉や、「舶来崇拜」という西洋への憧れがありました。外から、日本文化への「お墨付き」をいただいて、ようやく、日本人がその価値に気付きます。

（添田宗務総長）もちろん、外国人観光客が増えたと言っても、お賽銭をたくさんあげてくれたり、土産物をたくさん買ってくれる訳ではありません。でも、買いたいもの、売れる商品を並べていない土産物屋も工夫が必要です。東京にもあるだろう、大阪にもあるだろうという商品なら買いません。おそらくここにしかないものなら買う。そういうものを準備しないとイケません。

観光客が、単に通過するだけの旅行でなく、継続的に滞在し、繰り返し訪れ、お賽銭を入れてくれる、信者になって、最後には自分が坊さんになって、世界中に賽銭を集める人になってくれる、というところまで引っ張っていく努力をしないとイケません。新興宗教では既にやっていることですが、伝統宗教も過疎地の末寺を抱え、やっと、このままではいけないと気が付いてきました。

【和歌山の桃、柿は世界一】

——では、最後に、和歌山県民へのメッセージを。

（添田宗務総長）紀の川流域——西の端は桃山町、東の端は橋本市——は、元々、高野山の莊園でした。桃の産地からは、信者の方が桃をよく持ってきてくれました。岡山の桃、山梨の桃、日本全国に桃の産地がありますが、桃山町の桃が一番おいしい。ところが、最近、その桃が小さくなっているので、どうしたのかと尋ねますと、「いやあ、一番よい桃は、採れたらすぐ飛行機で上海へ持って行くのです。1日で着きます」とのこと。桃は「桃源郷」という言葉もあるように、中国人にとっては、西瓜やバナナや苺と比べられない特別な果物で、なぜかという、桃は「種」が大きい。子供が大きくなる。吉祥、めでたいものです。中国では、1つ1000円、1500円でもどんどん売れるらしい。

我々がおいしいと思うものは、世界中で通用します。それはリンゴでも同じことが言えます。中に蜜が入っていて、こんなのは世界のどこにもありません。ヨーロッパのリンゴなんか、小さくて石みたいでまずい。米も、世界中で日本の米ほどおいしいものはありません。中国人が、日本で炊飯器を買って帰りますが、あの炊飯器で、中国の米を炊いても一つもおいしくない。日本の米でこそおいしいのです。

要するに、仏教にせよ、観光地にせよ、果物にせよ、日本人が持っているものは、世界で通用します。日本で洗練されてきたものは世界一。和歌山の桃にしても、柿にしても世界一です。それを自信を持って世界に売り出してほしいと思います。

（平成26年12月12日、高野山真言宗総本山金剛峯寺にて収録。聞き手／構成（一財）和歌山社会経済研究所研究委員 谷 奈々）